
龍舞う夜に咲くサクラ

近衛龍一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍舞う夜に咲くサクラ

【Nコード】

N8134Y

【作者名】

近衛龍一

【あらすじ】

モテるのに女子を大の苦手とする如月龍。
ある日、母親に仕送りを盾に1人の女の子を預かってくれと頼まれる。

渋々約束の場所に行った龍は、滅多に咲かない桜の下で、少女、東雲桜と出会う。

この出会いが冷たい龍の性格を少しずつ穏やかにしていき……？

『奇跡』（前書き）

新連載です！

よろしくお願ひします！

『奇跡』

『奇跡』

この世の誰もが知っている言葉で、この世の誰もが何かしらの奇跡を信じている。

この世に存在する奇跡は偶然なのだろうか？

数少ない奇跡を経験した人にだってその答えは分からない。

『これは奇跡なんかではない。運命だったんだ』

出会いという名の奇跡にあった人は皆、こう言う。

しかし俺は出会いとは奇跡だと思う。

出会うはずのなかった2人が出会い、その出会いをものにする。

それが奇跡なんだと思う。

龍舞う夜にしか咲かないサクラの木の下で、満開に咲くサクラの中、俺とあいつは出会ったんだから……

電話

「あ、あの！ 私、ずっと如月君のことが好きでした！ 付き合ってください！」

「……………断る。他を当たってくれ」

「む、無理です！ 如月君以外の人を好きになるなんて！」

「それで俺が納得すると思うか？ 無理なものは無理だ。俺はもう帰る」

「あ、如月君！」

俺の名前は如月龍^{きげんりゅう}。

私立桜坂高校に通う高校二年生だ。

自慢ではないが、俺はかなりモテる方だ。

週に1回は告白されてはフって、されてはフって…………

そんな日常がただ続いている。

毎回断っている理由は、俺が女子を嫌っているから。

もつと言えば、女子という存在を嫌っている。

毎日懲りずに俺を見てはキヤーキヤー言うその存在が嫌いなのである。

そして今また、女子をフった。

毎度のことで軽く流した俺は、靴箱で上履きから靴に履き替えて学校を出る。

はあ……………いつまでこんな生活が続けばいいんだ……………？

最近はまだ一度告白しにきやがるやつもいるし、散々だ…………

早く帰って寝よ…………

「おう龍！ 今帰りか？」

「ん？ なんだ翔太か……………」

「なんだはねえだろ。女の子が追いかけてきたとも思ったのか

「？」

「やめてくれ……。ついさっき女子をフッタばかりなんだ……。追いかけてくるだ？ とんでもない。んなこと微塵も思わねえよ」

「ったく、またフッタのかよ。羨ましいねえ、モテるやつは」

ヤレヤレと両手を広げてため息を吐くこいつは楠木翔太。くすのきしやうた

小学校の頃からの幼馴染で、同じクラスの腐れ縁。

女たらし……。という訳ではないが、俺にやたらと羨ましいと言ってくる。

こっちの気も知らずによく言うぜ……

「そういうなら俺と変わるか？」

「出来ればそうしたいぜ。一度くらい女子にモテてハーレムを……って痛っ!？」

妄想を膨らまそうとしていた翔太の頭に学生鞆がヒットし、翔太が現実に引き戻される。

こんなことするやつは……

「翔太つたらまたそんなこと言って！ モテればいいってもんじゃないでしょうが！」

「り、理央……。っ!？ いつから居たんだ!？」

「ちようど見かけたから今来たのよ」

小村理央。こむらりゆう

これまた俺の幼馴染で、同じクラス。翔太と同じく腐り縁である。小柄な体とポニーテールが特徴的で学校内では結構人気が高いらしい。

強気な性格だが、昔から翔太に恋心を抱いている純情なやつ。

残念なことに今だにその気持ちは翔太に届いていないが、ずっと翔

太一筋である。

女子嫌いな俺であるが、翔太のことが好きだということを知っていることと、幼馴染ということもあり、仲のいい数少ない異性である。

「まったく……何を話しているのかと思えば……っ！」

「な、なんで理央は怒ってるんだ……？」

「お前がモテたいなんて言うから悪いんだよ」

「????？」

プンスカ怒っている理央の前に、わけがわからないといったような顔をしている翔太。

…… やっぱ翔太は筋金入りの鈍感だな。

「まあ翔太の件は後でじっくり話を聞くとして、龍はまたフツたの？」

「ああ。別にいいだろ。理央だって俺が女子のことが嫌いなもの、知ってるだろ？」

「それはそうだけど……」

「つか今サラッと俺にとって聞き捨てならない言葉が入っていたんだが……？」

「俺はいくら告白されても付き合うつもりはないんだ。それじゃあまた明日な」

「まさかのスルーだと……っ!? おい龍! 俺を見捨てて行くな! 助けてくれ!」

ここからは翔太や理央たちとは違う道なので別れる。

翔太は無視。長年理央の気持ちに気づいてやれないお前が悪いんだ。今だ助けを求めてくる翔太を後に、俺は自宅の方に足を進めた。

電話を取ろうか迷ったが、もしかすると俺の聞き間違いかもしれないのでもう一度電話を取る。

『まったく龍ったら！　なんで電話を切るのよ』

「すまん。ちよつと母さんのフリーズにありえないものが聞こえてきたから。で、何を頼みたいって？」

『だ・か・ら！　女の子を一人預かってほしいの！』

「……………やっぱ電話切るぞ」

『何だよ！』

「何でよじゃねえよ！　何故に俺が女の子なんか預からなくちゃいけないんだよ！」

『いいじゃない。あなたの唯一の親からの頼みなのよ？』

「息子一人置いて父さんを追いかけていった母親が言う言葉か！？」

『だってえ、お父さんと一緒にいたいんだもん』

「『だもん』　じゃねえ！　つたく、とりあえず俺が預かることになった経緯と理由を教える」

『実は今日お父さんの昔のお友達に会って…』

「うんうん」

『そのお友達も転勤することになったらしいの』

「それで？」

『そのお友達には一人娘がいるんだけど、どうもその娘と一緒に転勤することが出来ないらしいの』

「なんでだよ」

『アメリカに転勤するらしくて、お父さんが忙しいからその娘が上手く生活できるか分からないんだって』

「ほうほう」

ふむ。ここまで聞くとそれらしい話だな。

『だからその女の子を私たちが引き取ることになったから龍が預か

つて
』

「意味分かんねえよ！ 今のどこに俺が預かる流れがあつた！？
母さんが引き取つたなら母さんが預かればいいだろうが！」

『ええ〜？ だつてそれだとその娘も福岡に連れていかないといけないじゃない。どうせだつたら馴染みのあるところの方がいいですよ？』

「だからつて俺に押し付けるなよ！ 絶対に嫌だからな！」

『断れないわよ？ 仕送り、どうするの？』

「く……………っ！ 卑怯者め……………っ！」

桜坂高校はバイト禁止。

その為、親からの仕送りがなくなると生活が出来なくなる。
人の弱味を突きやがったな……………っ！

『さ、どうするの？ 安心して。その娘の分の生活費もちゃんと送るし、預かってくれるなら龍のお小遣いも上げてあげるわよ？』

「ちっ……………！ 分かつたよ。引き受けるよ……………」

『ふふっ！ ありがとね龍。それじゃあ今日の夜8時に待ち合わせしましょ。龍神桜の下のベンチでいいかしら？』

「ああ……………。それで、預かるのはどれくらいの子なんだ？」

『あなたと同じ高校2年生よ』

「なっ！？ ふざけるな！ なんでよりによって高校生なんだよ！

おかしいだろうが！」

『あらなんで？ ……もしかして龍、ロリコンに目覚めたとか……………』

『んなわけあるか！ 俺が女子が嫌いなもの知ってるだろ！ なんでよりによって同じ学年なんだよ！』

『だからよ。龍だつたら絶対に襲わないもの。安心して預けられるわ』

「安心するな！ というかその父さんの友達は怒らないのか!？」

普通ならどこの骨かも分からないようなケダモノかもしれない男の家に可愛い娘を預けるなんて嫌だろう。

『ええ。龍の写真見せたらこの子になら娘が襲われてもいいって言うってたわ』

「んだと!?!? ってことは最初から俺に預けるつもりで話を進めていたのか!?!?」

ふざけやがって!

自分の息子を何と思ってるんだ!

『ああ、ついでにその娘、明日から龍と同じ桜坂高校に編入するか、その辺もよろしくね』

「あ! ちよつと待てよ!」

ガチャン

俺の呼びかけも悲しく、電話は無常にも切られてしまった。
やべえ……頭痛くなってきた……

龍神桜の木の下で

「うつつ……寒いな……」

午後八時ちよつと前。

四月上旬だというのにまだまだ外が寒い中、俺は仕方なく家を出た。防寒のため、パーカーを羽織り、手袋とマフラーをつけての外出。暗い夜道を街灯だけが照らす中、近所の桜並木道にある龍神桜を指した。

龍神桜は近所では有名な桜の木である。

とても大きく、たくさん蕾がついているこの桜は、滅多に咲くことがなく、俺は龍神桜が満開になったところをみたことがない。

それどころか、たった一人からしか龍神桜が咲いているのをみたことがある、という話を聞いたことがない。

そしてこの龍神桜にはいくつかの伝説が残っている。

『夜空に龍が舞い飛ぶとき、龍神桜はその蕾を満開に咲かせる』

これはその伝説の中の一つ。

とても非科学的で信じられないが、咲いたところを見た人がほとんどいないのだから、そういう伝説が残っても仕方ないだろう。

その伝説からなのか、満開の龍神桜の下で口付けを交わしたカップルは永遠に結ばれる、なんて噂まである。

「しかし憂鬱だ……」

はぁ、と重たくため息を吐く俺。

なんで俺が女なんかを家に置かなきゃいけねえんだよ……

そりゃあ女の子大好きな男からすればウハウハなイベントになるだろうが、俺にとっては単に酷なだけだ。

ただでさえ女子を避けるのに大変だったのに……

頭の中では今後どんな生活をしようかという緊急会議が開かれる。もちろんのことであるが、決してどうやってフラグを立てようか、なんて考えていない。

絶対に。

寧ろその逆に近い。

どうすればあまり接することなく生活できるかを考えているのだ。

無論、同居する以上はどうしてもそいつと接することになるだろう。だからそれを最小限に抑える為に頭を働かせているのだ。

むう………なかなかいい案が出てこない……

というか、こんなことを考えたことがあるやついるのか？

「……………」

そう考えた瞬間に、一体自分は何をしているのだろうかとかとバカらしさを覚える。

なんだって誰も考えないようなことを俺は考えてるんだよ……

くそっ、これも全部母さんと父さんのせいだ……

覚えてろよ……

ブツブツと文句を言いながら歩くことしばし。

集合場所である龍神桜に着いた俺は絶句した。

「桜が………咲いてる………?」

見事。

その二文字が俺の頭の中で躍る。

夜に咲くその桜は今まで見たことがないくらい見事に咲き誇ってい

て、とても綺麗なものだった。

凄い、凄すぎる……

ありえない奇跡に感銘を受ける……ところなのだが……

「凄い。凄いが何故今日なんだ!？」

本当に最悪である……

なんでよりによって女が俺の家に住むという最悪な日に綺麗に桜龍神桜を見なくちゃいけないんだ!？」

神は俺を嫌っているのか!？」

しかも集合場所はその下のベンチだぞ!？」

もつとめでたい日に見せてくれよ!

「龍! こつちよ!」

滅多に見ることができないものを見れたのだから、良かったと思わべきなのか、はたまたこんなバツトタイミングなところで見るくらいなら見ない方がマシと思うのか。

無駄に葛藤することになってしまった俺に声をかけてきたのはこの話の根源である母さんだった。

桜の木の下で手を振る母さんの元に嫌々ながらも足を進める。

母さんの隣に座っている人がきつと家にくる女なのだろう。

暗くて顔があんまりよく見えないが……

「凄いわね、この桜! お母さんがお父さんと出会った日に見たのと同じくらい綺麗だわ!」

「そうかよ……」

そう、さっき俺が言った龍神桜が咲いているところを見たことがある一人は皮肉にもこの母さんなのである。

「この桜が咲いているちょうどこの場所でお父さんと出会ってね？」

「その話もう何百回も聞いたから……」

耳にタコができる程聞いたその話。

嘘か本当か分からないが、おそらく本当のことであろう。

「で、本題に入るが、そいつが母さんの言ってた人か？」

「そうよ。ほら桜ちゃん」

母さんの後ろに身を隠していたそいつは、おそろおそろ母さんの後ろから出てきた。

「ど、どうも。東雲桜しのめぎらですつ。よろしく願いますつ」

透き通るような肌に茶髪のポニーテール。小さい顔に整った輪郭と蒼い瞳。

そしてその小柄で華奢な体のそいつは、俺に向かってペコリとお辞儀をしてきた。

こいつ……本当に高二なのか……？

理央も十分小さい方だと思っていたが、こいつはもっと小さい。

まあ雰囲気は高校生っぽいが見た目は中学生と変わらねえぞ……

「お、おう。如月龍だ。よろしくな」

ちょっと意外だった俺は慌てて挨拶を返した。

ゆっくりと顔をあげたこいつ……東雲はオドオドとして、不安そうな表情を見せる。

まあ親元離れてわけのわからん男のところに残られるんだし当た

り前か。

しかしまあ……安心した。

何がって預かるやつのことだ。

見た感じ大人しそうだし、ある程度のことを教えていればそんなに
関わらずにするかもしれない。

「この子、ちょっと人見知りだからよろしくね？」

「俺はそこらの保育園の人じゃないんだぞ……そんな気軽に言うな
……」

「でも良かったじゃない。まさか龍神桜が咲いてる中で会えるなん
て。もしかすると私たちと一緒に結ばれるかもよ？」

「やめてくれ母さん……」

ほんと、縁起でもない……

「あら何ですよ。いいじゃない、桜ちゃんは可愛いんだし、龍のお嫁
さんにほしくらいよ」

「ふえ！？ いいい、一体何を言ってるんですか!？」

「やめてやれ母さん……こいつ嫌がってるだろうが……」

「いい話と思っただけ……」

顔を真っ赤にして慌てる東雲。

きつとそついうのに慣れてないのだろう。

「たたく……母さんも何を言い出すんだ……」

「それじゃあ龍、よろしく頼むわね。お母さんもう行くから」

「へいへい分かったよ。どうせ父さんが近くで待ってるんだろ？」

「あらよく分かってるじゃない。お父さんが折角だからここでデー
トでもしていこうって言ってね」

大方そんなところだろうと思った。
でなければ普通は家に直接連れてくるだろうからな。

「ったく……いい歳して何がデートだよ……」

「いいじゃない。でも本当に今日はいい日だわ！ まさか二回も龍神桜が咲いている中でお父さんとデートできるなんて！」

「ノロケも程々にしといてくれよ……」

「それじゃあね龍！ 桜ちゃんもまたね！」

そう言い残すと母さんは走って近くにある駐車場に向かっていった。さて、俺も帰りますか。

「そんじゃ、俺たちも帰るぞ。よいしょっと」

「あ、荷物」

ベンチに置いてある荷物を持つと東雲は慌てて自分で持とうとした。

「気にするな。俺が持つ。お前は着いて来い」

「す、すみません。ありがとうございます」

結構量も多いし、東雲の体じゃ持ちきれないだろう。

未だ咲き誇る龍神桜を後に、俺は東雲と共に家へと向かった。

朝、コタローの裏切り

「そのこの部屋、開けてるから使ってくれ。荷物もそこに置いてくから」

「は、はいっ」

あらかじめ開けておいた部屋に、スポーツバックとキャリーケースを置く。

いや、流石に女子に部屋やらないってわけにはいかないでしょ。

別に俺は使わなくてもいいし。

俺が帰ってきたことに気がついてこちらにやってきたコタローを拾い上げ、もう一度声をかける。

「風呂、沸かしてるから好きなきに入ってくれ」

「わざわざすみません……」

「あと何か聞きたいことがあったら聞いてくれ。いいな？」

「はい。わかりました」

ふう。とりあえずこれである程度のこととは伝えたぞ。

「ただいまコタロー。いい子にしてたか？」

「ワンっ！」

頭を撫でながらそう尋ねると、コタローは俺の質問に答えることなく、元気に鳴いて俺の腕から抜け出した。

「コ、コタロー？」

抜け出したコタローが向かったのは……

「え……？ 私……？」
「ワンっ！」

東雲の元だった。

……なんかシヨックだな。

「もしかして豆柴ですか？」

「ああ、そうだ。よく分かったな」

「ええ。前に飼ってましたから」

「そっか」

「クウ〜ン……」

「えっと……抱いてもいいですか？」

「構わない。というか、コタローが抱いてもらいたいっばいしな」

コタローのやつ、普段は滅多に他のやつに懐かないのに珍しいな。

……ふあ〜……

やべえ……急に眠くなってきた……

きつと母さんの所為だな、こりゃ。

「悪い、俺もう寝るから」

「え？ まだ8時ちよつとすぎですけど……」

「なんだか疲れてな。もし飯食ってないなら、冷蔵庫に今日の晩飯の残り入れるから勝手にチンして食べてもらって構わない」

「あ、はい……了解です」

「すまん。それじゃ」

うん、一日目にしては結構順調だったんじゃないか？

とはいっても、30分も相手してないがな……

ま、コミュニケーションはとれなくはないし、何とかなりそうだ。

「つてるのか……？」

「時間はまだ5時半。」

「自分が起きておいてあれだが、早すぎる気がする。そつと台所に向かうと……」

「あ、起きましたか？ すみません、勝手に台所使わせてもらってます……」

「お、おう。気にしないでくれ」

「すぐに俺の存在に気づいた東雲が挨拶をしてきた。持参したものなのか、見覚えのないエプロンを着用している。」

「ところで、何をしてるんだ……？」

「住ませてもらうだけっていうのも悪いですから、ご飯くらいは私を作ろうと思ったんですけど……迷惑でしたでしょうか……？」

「い、いや。そういうわけではないが……あ、あとどれ位で作り終わる？」

「えっと、もう盛り付けるだけでよ」

「そ、そうか。朝飯作る時間早過ぎないか？」

「如月さんの目覚まし時計のセット時間に合わせて作ったんですが……まだ食べませんか？」

「え？ いやいや、食べるぞ。すまん、気を遣わせて」

「いえ、こちらこそ住ませていただいていますし」

「……何かがおかしい……」

「東雲にペースを全部持っていかれている気がする……なぜあまり話さないように決めたのに俺は翌朝からガッツリ会話を行っているんだ……っ！？」

「ワンっ！」

「おはようコタロー」

「コタロー……お前はもう慣れたのか……？」

平気で東雲にすり寄っていくコタローを見て、犬であるコタローの適応能力に感心すると共に、主人を乗り換えられた悲しい気分を感じたのはきつと気のせいではないだろう……

東雲が用意してくれた飯を完食した俺。

うん、普通に美味かったよ。

かなり料理は上手だった。

ただ、同じドックフードのはずなのに東雲が入れたドックフードをいつもより美味しそうに食べていたコタローがちょっとムカついたけど。

まあそれはさておいて、いつもなら朝飯の後はコタローの散歩のだが……

「東雲、悪いがコタローの散歩に行ってくれないか？」

「え？ 私ですか……？」

「ああ。俺はちょっとしなくちゃいけないことがあるし、何よりコタローがお前と行きたがっているように見える」

これは本当のこと。

コタローはご丁寧で東雲の

後ろで尻尾を振ってついてまわっている。

当然、俺にそんなことをしたことはない。

「道のことは安心しろ。コタローに任せておいたら勝手に歩いていって勝手に戻ってくるから。まあ念の為俺の携帯預けておくから何かあればウチに電話してくれ」

「あ、携帯なら私、持ってますよ」

「そうか。だが、まだ家の番号登録してないだろ。帰ってきたらまとめて登録するから今は俺の携帯を持っていくといい」

「はい、そうします。コタロー、じゃあ行こっか」

「ワンっ！」

部屋からパーカーを取り出ししてきた東雲はそれを羽織ってコタローと共に散歩に出かけた。

「……………コタローのやつ覚えてるよ……………あんなに楽しそうに散歩に行ったのはじめて見たぜ……………」

んにしても……………」

「なんなんだこの妙に慣れた感じは……………?」

同居生活が始まってまだ一日も経ってないというのになんだかこれが当たり前みたいだ……………」

「……………気にしてもしょうがないか……………?」

今は深く考えない方がいいと判断した俺は、台所へと向かった。

へ? 何をするのかって?

朝飯の片付けと弁当だよ。

東雲がいたら私が作りますとかいいそうだったしな。

まあこれも東雲を散歩に出した理由の一つだ。

いつもの通りの静かな台所でいつもの通り弁当を作りはじめた俺であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8134y/>

龍舞う夜に咲くサクラ

2011年11月29日02時00分発行